
トリスタンとイゾルデ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トリスタンとイゾルデ

【Nコード】

N2069K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

コーンウォール王の下へ嫁ぐことになったイゾルデ。だが王の甥であり忠臣でもあるトリスタンを密かに想っていた。その彼と共に死ぬ為に飲んだ筈の薬により二人は夜の愛へと誘われるのだった。ワグナーの大作を小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

第一幕その一

トリスタンとイゾルデ 第一幕 コーンウォール

への船

アイルランドとコーンウォールを隔てる海。今その海を一隻の船が進んでいた。

大きく帆も見事な船である。船から船乗りの唄が聴こえてくる。

「目は西の方へ向くが船は東に進む」

まずはこう歌われる。

「風は故郷に向かって爽やかに吹く。アイルランドのあの娘は今どうしているだろう」

さらに歌われる。

「帆を膨らませる風は彼女の溜息か。風よあの娘の為に吹け」

「あの歌は」

船の奥の一室。そこは船室だがベッドもあればいささかの装飾品も置かれている。そうしたものを見る限りここにいるのはかなりの身分であることがわかる。見ればそこにいるのは黒い、まるで夜の国の女王の様な服に身を包んだ夜よりも黒くそれでいて艶のある長い髪に黒檀の輝きを持つ瞳に白い肌を持つ女だった。顔立ちは幽玄でありこの世のものとは思えぬ美貌があり背は大きい。その美女の言葉だった。

「私をからかっているの？」

いささか取り乱した様子で顔をあげて言うのだった。何処か金属的な、高い女の声だ。しかしその声を発する顔はやつれ蒼ざめている。まるで妖精の様に。

「ブランゲーネ」

「はい」

今度は共に部屋にいた緑の服に黄金の髪と青い瞳の女に声をかけ

た。彼女は黒い服の女よりは小柄で顔は小さくそれでいて彼女よりも大人びていた。その彼女がやって来たのだった。

「どうされました？イゾルデ様」

「私達は今何処にいるの？」

「東のほうに青い光の輪が上がってきました」

「こうイゾルデに告げるのだった。」

「船は穏やかに早く東に進んでいます。コーンウォールには夕方に着くかと」

「夕方なのね」

「おそらく」

「またイゾルデに答えた。」

「コーンウォールの緑の浜に着きます」

「嫌よ」

「だがイゾルデはそれを聞いて顔を背けた。」

「今日でも明日でもそれは」

「ですがそれは」

「墮落した家系、先祖の名誉に値しない」

「イゾルデはその背けさせた顔でまた言った。」

「海や嵐を動かす力は何処に。私が使える術は薬だけ」

「嘆きながら言葉を続ける。」

「この胸から大きな力は生まれては来ない。躊躇う風よ、私の願いを聞いて」

「上の方を見ての言葉だ。」

「戦いの為に荒れ狂い嵐を起こし竜巻を起こして」

「何故そのような」

「この夢見る海を眠りから揺り起こし呻く欲望を海底から呼び起こすのです」

「イゾルデ様」

「ブランゲーンが止めるのも聞かない。」

「それ以上は」

「この強情な船を打ち砕きこの船にいる全ての者を飲み込むのです」
「何故今になってそのようなことを」

ブランゲーネはそんなイゾルデの肩を抱きながら彼女に言う。
「御父上や御母上の御前ではそのようなことは仰らず涙一つ流されなかつたのに。けれど今は冷たくおし黙って蒼ざめた御顔で碌に食事もされず」

言葉を続ける。

「眠られず。もう見てはいられません」

「窓を開けて」

イゾルデはそのブランゲーネに対して言った。

「その窓を。早く」

「窓をです」

「ええ」

またブランゲーネに告げた。

「早く。その窓を」

「わかりました。それでは」

イゾルデに言われるままその窓を開ける。するとそこから青い海と空が見える。だがその蒼はそれぞれ違っていた。イゾルデはその青を見るのだった。

そこにまたあの歌が聴こえてきた。

「爽やかな風は故郷へと吹いていく。アイルランドの娘は今何処に」
「あの男は何処に」

イゾルデはその窓から目を離してまたブランゲーネに問うてきた。

第一幕その二

「私に選ばれ私から失われ気高くして健気でかつ勇敢な、それでいて臆病なあの男は」

「それは一体」

「死に捧げられた心と身体を持つあの男は」

「誰のことですか？」

「この船にいる勇士のことよ」

またブランゲーネに話した。

「あの黒い髪と瞳の男は」

「トリスタン様のことですか？」

ブランゲーネは少し考えたうえでイゾルデに対して尋ねた。

「それは」

「そうよ」

「あの素晴らしい御方のことですか」

「勇士ではありません」

イゾルデはまずこのことを否定した。

「己の主君の為に死骸の花嫁を得た故にいつも何かされはしないかと逃げているような男は」

「また何を仰っているのですか？」

「この意味がわからないのならあの男をここに」

またブランゲーネに告げた。

「呼んで来るのです。主人である私の元へ」

「その様な御無体なことを」

「名誉の挨拶を忘れ礼をないがしろにし私の眼差しを避けているあの男を。それが何故かは自分自身が最もよく知っているというのに」

「あの方に貴女に挨拶するように御願いするのですか？」

「主人たるイゾルデが召使たる臆病者に命じるのです」

あくまで彼を勇士とは認めないのだった。

「さあ、早く」

「わかりました」

ブランゲーンはその言葉を受けて意を決した顔になって一旦部屋を出た。そうして船の指揮の場所にいる濃緑の、森の色を思わせる服とズボン、マントを羽織った男に声をかけた。彼は背は高く逞しく黒く豊かな髪に澄んだ黒い瞳を持ち顔は引き締まりそれでいて気品がありまさに英雄の顔であつた。その彼に声をかけたのである。

「イゾルデ様が私に」

「そうです」

ブランゲーンはイゾルデに告げた。

「御呼びです」

「貴女を通じてですね」

「そうです。御会いしたいと」

またトリスタンに話した。

「是非にと」

「間も無く上陸です」

トリスタンはいささかいぶかしむようにしてまずこう話した。

「長い旅路が終わるというのに姫様は塞ぎこまれたまま。その姫が」

「姫は望まれています」

ブランゲーンはさらに彼に話す。

「ですから」

「この青い海から間も無くの緑の陸地では王がお待ちです」

トリスタンの声は落ち着き良識のあるものだった。

「その王の下に姫をお連れするのが私の役目ですが」

「ですが姫は今貴方に」

「私は何処にいても女性の最高の誉れであるイゾルデ姫にお仕えしています」

恭しく述べる。

「しかし今ここを離れたら」

舵を見る。

「船は無事にコーンウォールに辿り着けるでしょうか」

「しかし姫は」

「いえ、それはなりません」

ここでトリスタンよりいささか小柄で白い髪を短く切った初老の男が出て来た。警戒そうな暗灰色の服とズボンを着ており飄々とした顔に緑の目を持っている。

「クルヴェナール殿」

「よいですか、ブランゲーネ殿」

ブランゲーネにクルヴェナールと呼ばれた彼はさらに言葉を続けた。
てきた。

「コーンウォールの王冠とイングランドの富をアイルランドの姫君に委ねられる役をされるトリスタン様はそのアイルランドの姫様の意のままにはなりません」

「それはどういう意味ですか？」

「トリスタン様は王の甥です」

それだけ高貴な者というのだ。

「そのトリスタン様はコーンウォールの名誉そのものですから」

「だから従えないと」

「クルヴェナール」

トリスタンは彼の言葉を目で制しようとするがクルヴェナールはさらに言葉を続けるのだった。

第一幕その三

「あのモロルト卿は我がコーンウォールから貢物を得ようと海を渡って来られたがトリスタン様に倒された」

このことを話した。いささか挑発する顔で。

「イングランドの勇士、アイルランドに誓った姫様がいたこの方はトリスタン様の納められた貢物を受け取られたのです」

「モロルトはアイルランドで倒れた」

ここで船員達もクルヴェナールに続いて言う。

「これがイングランドに納めた貢物。トリスタン様の納められた素晴らしい貢物」

これが返礼だった。ブランゲエネは止むを得なくその場を後にしイゾルデの側に戻った。そうしてこのことをイゾルデに対して話すのだった。

「コーンウォールの者達はそのようなことを」

「はい」

痛々しい声でイゾルデに答えた。

「そうです。トリスタン様も」

「何ということ」

イゾルデはブランゲエネにもたれかかるようにして嘆きの言葉を出した。やはりブランゲエネはその彼女を支えている。

「そして私はアイルランドからの貢物だと」

「あのクルヴェナール殿が」

「従者の言葉は主の言葉も同じ」

当時の欧州ではそれが常識だ。

「彼等が私に嘲りの言葉をかけたからには私もそれで返しなう」

「嘲りですか？」

「みすばらしい小舟がアイルランドの岸に辿り着きその中から一人の傷付いた男が現われた。このイゾルデの術で傷を癒す為に」

この言葉をさらに続ける。

「タントリス。けれどその素性はその壊れた剣でわかった。素晴らしい剣が壊れたのはあの方との勝負の結果であるとわかったから」
「おわかりになられたと」

「白刃で消そうとしたけれど私は慈悲によりそれを止めた。傷付いた者を害することはしなかった」

思い詰めた顔での言葉であった。

「モロルト様がつけられた傷口を治してやり帰した。あの時は」
「そうです」

またブランゲーネに答えた。

「あの時の騎士こそが」

「貴女も先程聞いたようにあのトリスタンこそが」

イゾルデは衰弱しきった顔だったが目の光は強かった。

「あの時の男です」

「まさかそうだったとは」

「あの時は何度も感謝と忠誠を誓ったというのに今ではこうです」
忌々しげに語る。

「タントリスとして帰したのにトリスタンとして現われ」

忌々しげな言葉はさらに続く。

「しかも誇らしげに船を操り己の伯父の為にアイルランドの世継ぎの姫たる私を運ぶ」

何故かこの言葉には屈辱はなかった。あるのは何かしらの迷いや腹立たしさ、そうだったものであった。だがブランゲーネはこの不思議な言葉の色には気付かなかった。

「イングランドの勇士にして私と将来を誓ったモロルト様がおられれば」

この言葉にも迷いがあった。

「コーンウォールの方が貢物を差し出したでしょうに。しかしこれも」

「これも？」

「全て私の撒いた種」

忌々しさは健在だった。

「全て。私の撒いた種」

「どうしてそこまで」

「思わずにはいられません」

その黒い瞳は下の、船の甲板を見ている。しかし甲板は見えてはいなかった。

「どうしても」

「そこまで思い詰められていたとは」

ブランゲ―ネはそれに気付かなかった己の迂闊さを呪った。

「申し訳ありません」

「謝る必要はありません」

イゾルデはそれはよいとした。

「ただ」

「ただ？」

「この目は盲目で心は愚かで」

思い詰めた言葉は変わらなかった。

「そして躊躇い沈黙していた私」

「姫様……」

「その私が秘めていたことをあの男は誇らしげに言う」

「トリスタン様が」

「黙って私に助けを求め一言も言わず。私がモロルト様の仇を討つことを諦めたことも意に介さず。そして王にも意気揚々と語ったのでしょうか」

「それは考え過ぎでは？」

「考え過ぎではありません」

イゾルデはそう確信していた。

「私を貶めそのうえでアイルランドからの捧げものにする。あの破廉恥な男が」

「落ち着いて下さい」

ブランゲーネはそのイゾルデに告げる。

「お気持ちはわかりますが」

「だから何だというの？」

「ですがトリスタン様も貴方に恩義を感じておられるからこそコーンウォールの冠を貴女に捧げるのではありませんか？」

こうイゾルデに言うのだった。励ます為に。

第一幕その四

「あの方は伯父である王の下僕」

「ええ」

「そしてあの方はコーンウォールの跡継ぎでもあられました」

「今は違うというのね」

「貴女が后になられるのですから」

「だからだというのである。」

「そのうえで貴女にお仕えするというのですよ？どうしてその様な方を拒まれるのですか」

「私は。そんな」

「お嫌ですか？」

「認めないわ」

首を横に振つての言葉だった。

「私は。その様なことは」

「それにコーンウォール王は御身分も御気性も立派で」

今度は王、マルケ王に対して語る。

「権勢も名誉も持つておられます。その様な御方です」

「コーンウォール王は」

「トリスタン様はその王にお仕えしています」

またこのことをイゾルデに告げる。

「何も御心配がありません」

「愛されもせずその様な気高き人を傍らに見るのは」

「愛されてもいない等と」

またイゾルデを抱き締め励ます。

「姫様を愛されなかった者がいますか？」

「私を？」

「姫様を見て至幸の愛を感じない者はいません。例えば王が冷たい方で魔に覆われていても愛の力に勝つことはできません。それに」

「それに？」

「母上の御力をお忘れですか？」

今度はこのことをイゾルデに囁いた。

「母上の御力を」

「お母様の」

「そうです。私はお母上によくして頂きました」

「それは知っているけれど。お母様のことも」

「そうです。その私が今ここにいますし」

「ではブランゲーネ」

イゾルデは俯いたままそのブランゲーネに告げた。

「あれを」

「あれ？」

「そうです。あれを」

またブランゲーネに告げる。

「あの箱を持って来て。あの黄金の箱を」

「あの箱をですか」

「お母様が私に授けてくれた妙薬よ」

こう言うのだった。

「傷や痛みにも毒にも効くその妙薬を」

「これですか」

ブランゲーネはイゾルデの言葉を受け早速部屋の端にある黄金色の箱を持って来た。そうしてそれを開けてイゾルデの前に差し出す。するとイゾルデはそこから小瓶を一つ取り出したのだった。

「それは」

「これこそその妙薬」

イゾルデは蒼ざめた声を出しつつその小瓶を取り出したのだった。ブランゲーネはその瓶を見て顔を強張らせた。

「今の私にとつては」

「姫様、それは」

ブランゲーネが何か言おうとする。しかしここでクルヴェナール

が部屋に入って来た。

「姫様」

「何ですか？」

「間もなくコーンウォールです」

こう二人に告げるのだった。

「上陸の用意を。お早めに」

「わかりました」

まずはブランゲーンが彼に伝える。イゾルデはその彼女から離れクルヴェナールに顔を向けていた。

「それでは」

「そして我が主からの御託です」

彼は続いてこう言ってきた。

「王に会われることをお楽しみにと」

「わかりました。それでは」

「はい」

クルヴェナールはイゾルデの言葉を受けた。イゾルデは言葉をさらに続ける。

「トリスタン殿にお伝え下さい」

「何と？」

「王の前に御一緒に出られることを望まれるのなら礼に適った方法で済んでいない償いをしてからにして欲しいと」

「我が主にですか」

「そうです。さもないければ貴方の案内でコーンウォールには向かいません」

言葉は強かった。やつれてはいたが。

第一幕その五

「王の御前に出るつもりありません。礼に適った方法で私の厚意に求めない限りは」

「わかりました」

クルヴェナールはとりあえずはイゾルデのその言葉に頷いた。

「そう申し上げておきましょう」

「御願います。ここに来られるよう」

最後にこう告げた。クルヴェナールは一礼してからこの場を後にした。イゾルデはまたブランゲーネと二人になるとその蒼ざめた顔を彼女に向けつつ言うのだった。

「ではブランゲーネ」

「どうされるおつもりですか？」

「ここであの男を待つのだよ」

まずはこう答えた。

「あの薬で」

「そんな……」

ブランゲーネはイゾルデの言葉を聞きその唇を強張らせた。震えてさえる。

「あの薬は」

「あの妙薬を黄金の杯に一杯」

「こう言うのだった。」

「一杯。注ぎ込んで」

「本気ですか？」

ブランゲーネはイゾルデが持っていたその瓶を受け取りつつイゾルデに問う。

「そしてそれは」

「私を欺いたあの男に」

「トリスタン様に」

「そう。罪の償いの為に」

イゾルデは言う。

「いいですね」

「何と恐ろしいことを」

「お母様の下された最高の妙薬。どのような傷や痛みにも」

イゾルデの言葉は続く。

「毒にも効く妙薬を。あれこそがお母様の下された妙薬なのですから」

「それだけは」

ブランゲーネは必死にイゾルデを止めようとする。

「なりません。何があっても」

「聞くのです」

だがイゾルデは聞こうとはしない。

「私の。この言葉を」

「それは」

「いいですね」

ブランゲーネが返答に困っているとその時だった。またクルヴェナールが部屋に戻って来た。そしてこう二人に告げるのだった。

「トリスタン様が来られます」

「どうぞ」

イゾルデはブランゲーネから顔を離しトリスタンに部屋に入るように告げた。するとすぐにそのトリスタンが部屋に入って来たのであった。

「御呼びでしょうか」

「はい」

イゾルデ以上に蒼ざめてしまい絶望しきった顔で頂垂れた倒れ伏さんばかりになるブランゲーネから目を離してトリスタンに伝える。クルヴェナールは部屋から去る。イゾルデはトリスタンを見据え続ける。そしてそのうえで立ち上がり彼に対して告げるのだった。

「私の望みを知っていながらそれを果たすのが恐ろしく私の目を避

けていたのですね？」

「敬いの気持ちで遠ざかっていました」

トリスタンは表情を顔に出すことなく言葉を返した。

「それだけです」

「敬いの代わりに嘲りではないのですか？」

だがイゾルデはこう言葉を返した。

「そうではありませんか？」

「服従の心から控えていただけです」

「王は御自身の花嫁にその様な無礼を教えるのですか？」

「それは誤解です」

「私の住んでいた国では花嫁を護る場合には護衛者は離れるべきだとされているのです」

「どうしてですか？」

「それがしきたりです」

あくまで突き放すようにして言葉を返すのだった。

「コーンウォールの」

「ではトリスタン殿」

イゾルデは強張り今にも壊れそうな顔のままでもまたトリスタンに告げてきた。

「私も一つしきたりをお教えしましょう」

「何をですか？」

「敵と和解する為には敵も誉める程の立派な態度を」

これをトリスタンに告げた。

「宜しいですね」

「敵とは」

「貴方の御心に尋ねられることです」

イゾルデはトリスタンを見据えていた。

第一幕その六

「私達の間には血の罪があるのですから」

「アイルランドとコーンウォールの間のそれは償われました」

「私達の間ではまだです」

イゾルデの言葉はトリスタンにとってよくわかる言葉だった。

「違いますか？」

「それは皆のいる前で復讐を断つ誓いが為された筈です」

「私がタントリスという男を匿っていた時誓いは為されませんでした」

絶望しきり頂垂れるブランゲーネを他所に言葉を続ける。

「あの時あの男は立派にも誓いましたが私は誓いませんでした。口をつくむことにしたのです。あの何もできなくなっていたあの男に對して」

こう言ったうえでまた言う。

「ですが今」

「今？」

「今それを果たすのです」

声はやつれてはいても強くなってきた。

「私は。今ここで」

「それが姫の誓いですか」

「そう。仇を取ることに」

それを今言い切った。

「それこそが」

「左様ですか」

「その仇を取ることこそが私の願い」

イゾルデの声はさらに強いものになった。

「そう、今ここで」

「ではそうされるといいでしょう」

トリスタンもまた覚悟を決めたようにして言葉を返した。

「貴女が望まれるのなら」

「言いましたね」

イゾルデもその言葉を聞き逃さない。

「今確かに。ですが」

「ですが？」

「貴方は王の甥にして無二の忠臣」

コーンウォールにとっては柱そのものである。トリスタンあつての国とさえ言われている。

「その貴方が王信頼をどう思われているのか」

「王の」

トリスタンも王を話に出されると弱かった。

「それは」

「私は平和を愛します」

イゾルデは不意にという感じで言葉を変えてきた。

「怨みは平和を害するもの」

「それはその通りです」

「だからこそ」

部屋の隅にいたブランゲーネに顔を向けた。

「私は今この償いの美酒を共に」

「償いの美酒を？」

「そうです」

ブランゲーネに目を向けながらまた言うのだった。

「だからこそ。貴方と共に」

「私もまたなのですね」

「そうです」

トリスタンに対して有無を言わせない声を投げ掛けた。

「何か言うことはありますか？」

「貴女には」

だがトリスタンは言うのだった。

「沈黙があります」

「それがどうかしましたか？」

「貴女の沈黙は私も沈黙せよという意味
こう言うのである。」

「私は貴女の沈黙を理解し、貴女を理解しないことを沈黙します」

「それは償いをすることを恐れているということですか？」

「イゾルデはあえて皮肉を込めてみせた。」

「そうではないのですか？」

「違います」

「船乗り達の声が聞こえます」

「間も無く上陸なので機嫌よくしているのだ。」

「王の御前も間も無いです。そして私を王に捧げるといいでしょう。
私の過去を話しながら」

「私はそのことには沈黙を守ります」

「先程の己の言葉を受けての言葉である。」

第一幕その七

「それだけです」

「逃げるわけではないですね？」

「アイルランドの不思議な術のことは知っています」

トリスタンはイゾルデの言葉に応えるようにしてこのことを話した。

「薬のことも」

「それが何か？」

「だからこそ受けましょう」

ブランゲーネがここで差し出した黄金の杯を受け取った。渡すその手が震えているのも見えていたがあえてそれは無視するのだった。

「償いの誓いの為に」

「受けられるのですね」

「トリスタンの名誉は最高の忠誠」

イゾルデに伝えて今また告げた。

「そして苦痛は大胆な反抗と心の偽り」

「だから受けられると」

「予感の夢、永遠の悲しみの唯一の慰め」

さらに話す。

「今名誉の為に忘却の妙薬を恐れることなく飲み干しましょう」

「欺瞞は許されません」

イゾルデもまた言う。

「半分は貴方が」

「はい」

「そして半分は私が」

イゾルデは今度はこう言う。

「飲みましょう」

「わかりました。それでは」

二人は見合つたまままずはトリスタンが杯の中にある酒を飲んだ。彼が半分飲むとその後でイズルデが杯を受け取って飲んだ。飲み干し杯がブランゲーネの手に戻るその間二人は動きを完全に止めていた。それから次第に身震いしだして見詰め合い。まずはイズルデが口を開いた。

「トリスタン」

彼の目をじつと見ていた。その黒い目を。

「イズルデ」

そしてそれは彼も同じだった。黒い瞳を見ていた。

「不実にして優しき人」

「至高の人」

二人はそれぞれ言うのだった。

「今私は心に従うことに」

「なろうとは」

見詰め合いながら言葉を交えさせる。しかしここで。

「着いたぞ！」

「コーンウォールだ！」

甲板の方から声がする。

「万歳！万歳！」

「王に栄光あれ！」

「姫様、着きました」

ブランゲーネは忠実な従者としてマントを持ってイズルデに近寄った。

「ですから。これを」

「トリスタン様」

クルヴェナールもまた部屋に来た。

「王が来られています。花嫁を迎える喜びにあふれて？」

「誰がだ？」

だがトリスタンはイズルデから名残惜しそうに視線を離してからそのクルヴェナールに問うた。

「誰がいるのだと」

「王です」

クルヴェナールは素直に答える。

「王ですが」

「どの王だ」

「何を言われるのですか？」

クルヴェナールには今の主の言葉の意味を察しかねたがそれでも答えるのだった。

「この声を御聞きになれば」

「万歳！万歳！」

「マルケ王万歳！」

「伯父上が……」

「あの呼び声は一体」

イゾルデもまたトリスタンから名残惜しそうにトリスタンから視線を離してブランゲーンに対して問うた。

「何ことなの？」

「姫様、何を」

ブランゲーンはいぶかしむ顔でそのイゾルデに問い返した。

「何を仰っているのですか？」

「私が飲んだのは苦しみのない湖の中へ向かう妙薬の筈」

イゾルデは己が仕込んでいた魔術の薬のことについて考えた。

「けれど。どうして」

「まさか。その妙薬とは」

ブランゲーンは恐る恐るその薬について考えた。

「死への誘いのものではなく愛への」

「トリスタン……」

もう薬のことは考えられずトリスタンをじっと見詰めた。

「私は」

「イゾルデ……」

そしてそれはトリスタンも同じだった。彼もまた熱い目でイゾル

デを見て離れない。

「私もまた」

「私は生きなければならないの？」

今にもトリスタンに倒れかからんばかりに語る。

「このまま苦しい光の中で」

「企みの喜び」

トリスタンもイゾルデを今にも抱き締めんばかりになっていた。

「欺瞞の生んだ幸いよ」

「万歳！万歳！」

「コーンウォール万歳！」

熱く、それでいて苦しく辛い目で互いを見る二人。しかし今船はコーンウォールに着いたのだった。光が二人を迎えるが彼等はその光を忌々しげに見るのだった。

第二幕その一

第二幕 トリスタンの国

城の前の庭だった。今その庭は夜の中にあり緑の木々もその中に消えてしまっている。それどころかその木々が暗闇をより深いものにさせてしまっていた。

その夜の世界の中、城の白い壁ですらその夜の漆黒の中に消えてしまっている中に二人はいた。イゾルデはブランゲーネに声をかけていた。

「聞こえるかしら」

「何がですか？」

「狩の物音が」

こうイゾルデに言うのだった。

「聞こえる？響きは遠くなって私の耳には聞こえない」

「かなり近くで聞こえます」

ブランゲーネは耳に神経を集中させて主に答えた。

「はつきりと」

「恐れ慄く心が耳を迷わせているのね」

イゾルデはブランゲーネのその言葉を否定するようにして呟いた。
「風が笑いつつ、揺さぶる木の葉の音を間違えて聞いたのではなくて？」

「憧憬の激しさに惑わされないで下さい」

しかしブランゲーネはこう返して主に忠告する。

「狩の角笛の音です」

ここでその角笛の音が聴こえてきた。やはりかなり近くだ。

「憧れている音と間違えられては駄目です」

「角笛の響きはあんなに優しくはないわ」

イゾルデはまだブランゲーネの言葉を否定する。

「あれは泉から湧き出る水のさざめきの楽しげな響きよ」

「どう思われるのですか？」

「角笛の音はまだ聞こえる？」

そのブランゲーネに対して問い返す。

「夜のしじまの中に囁くのは泉ばかり」

やはり己の感じるものを信じようとしている。

「私を待つ人をその角笛の音で遠ざけたいの？」

「貴女様が待たれるその方には夜にも目が付きまっています」

ブランゲーネは今主が待っているその者についても語った。

「私の警告を聞いて下さい。貴女がその目が見えなくなったとして
も世の人が貴女に注ぐ眼差しまでそうなったと思われませんか？」

「それは」

「違いますね」

主に問うその声が強くなった。

「トリスタン様の震える手から船の甲板の上で倒れるばかりに蒼ざ
めた花嫁を」

言うまでもなくイゾルデのことである。

「王が迎えられたその時周りは妙だと思いました」

「そうだったの」

「ですが心優しい王はそれを長旅の疲れだと思われ貴女を気遣われ
ました」

「そのことはわかつているわ」

王は噂通りだった。その心優しさと徳はイゾルデも感じ取り尊敬
さえしていた。

「ですがあの方だけは血会いました」

「あの方？」

「メーロト様だけは疑っておられました」

こうイゾルデに忠告するのである。

「あの方はじつと貴女とトリスタン様を見ておられました。疑う目
で」

「それはないわ」

イゾルデはこのことも否定した。

「メーロト殿はトリスタンの最も忠実な友人なのに。それは
「ないと仰るのですか」

「今日の貴女は」

遂にブランゲーネを咎める目で見た。

「あまりにも気にし過ぎよ。そこまで考えなくても」

「いいいのですね？」

「そうよ」

このことをはっきりと告げた。

「メーロト殿まで疑うとは。どう考えても」

「確かにメーロト様は信頼に足る方です」

ブランゲーネもそれは認める。

「王に対して絶対の忠誠を持たれそれが変わることはありません」

「それでは」

「しかしです」

ブランゲーネはここでさらに言うのだった。

「それは王に向けられたもので貴女様に向けられたものではありません
「せん」

「私に向けられたものではない」

「そうです」

彼女が言う問題はここにあった。

第二幕その二

「貴女様に向けられたものではありません。それ故に」

「それ故に？」

「あの方は貴女様とトリスタン様のことを心から疑っております」

「私達のことを」

「小宵の狩が行われるよう速やかに決められたのはメーロト殿の御言葉からです」

「何が言いたいの？」

「事実を」

その言葉が鋭くなった。

「あの方は何かを考えておられます」

「そこまで考えなくともよいでしょう」

イゾルデはそのことに対してまで考える余裕を失っていた。

「それよりも合図を」

「合図を？」

「そうです。松明の火を点けなさい」

こう命じるのだった。

「早く。この胸の不安を歓喜に変える灯りを」

「それは警戒の火ではなく」

「歓喜の火です」

あらためて言う。

「今こそ。その火を」

「それにより何も起こらないことを祈ります」

ブランゲーネはイゾルデの言葉には逆らわない。しかしこう呟くのだった。

「私が貴女様に渡してしまったあれは。まさか」

「愛の女神は全てを導く」

イゾルデは後悔していなかった。

「恐れを知らず世の成り行きを司る神」

「それが愛の女神だということですか」

「そう。生も死も彼女に仕えている」

こう言って引かない。

「喜びと苦悩の中から憎しみを愛に変えてしまふ。私はあの時本心を見ようとしなかった」

「そう仰るんですね」

「けれど愛の女神はその私に告げた。本心に従えと」

「ではそれで」

「私は今はそれに従う」

言葉も隠そうとはしない。

「何があるうとも」

「愛の女神の企みによるあの杯が貴女に迫る危機をも見せないでいることは」

「この胸を燃え立たせ心の炎を煽り魂に明るく微笑みかける」

イゾルデは森の中を見て呟く。

「愛の女神は夜を招いている。その輝きが彼方で強くなるから」

「この灯りを」

「そう、この灯りを」

ブランゲーネは今その松明の灯りを見た。

「私は今その灯りを見る。さあ、ブランゲーネ」

「はい」

「行くのよ」

ブランゲーネに行くように告げた。

「然るべき場所に向かいそして見るのです」

「わかりました。それでは」

ブランゲーネはその言葉に従い何処かへと姿を消した。彼女はその際に松明を消しそれにより世界は再び闇に覆われた。イゾルデはその闇の中待ち遠しそうに彼を待っていた。だがやがて闇の中に彼が来た。そうしてイゾルデの方に向かうのだった。

「イゾルデ……」

「トリスタン……」

「そう、私だ」

彼はイゾルデの方を見つつ答えた。

「今ここに」

「やっと出会えたのね」

イゾルデはトリスタンをじっと見て言った。

「私が永遠に愛する貴方に」

「そう、私は来た」

トリスタンはその彼に対して答えた。

「貴女を永遠に愛する為に」

「それは真なのか」

「そう、真よ」

今度はイゾルデが答えたのだった。

第二幕その三

「嘘ではないわ。だから私はここにいる」

「そして私も」

「私は貴方を感じている」

歩み寄り合い抱擁し合う。二人の抱擁はただの抱擁ではなかった。

「そして今見ている」

「私も貴女を見ている」

二人は闇の中で見詰め合っていた。

「こうして。貴女を感じている」

「目も口も耳も手も」

イゾルデはトリスタンの全てを感じ取っていた。

「そして胸の鼓動も」

「貴女の胸の鼓動を感じる」

「これは嘘ではないのね」

イゾルデはそれが信じられないとさえ感じてもいた。

「この感じは。決して」

「私もそれが疑わしい」

そしてそれはトリスタンも同じだった。

「今こうして二人でいるのは本当に」

「夢ではないのでしょうか」

トリスタンの胸の中で呟く。

「この魂の歓びも甘く気高く、そして美しく至高の悦び」

「この世のものとは思えない」

トリスタンはその思いをさらに強くさせていた。

「これ程の悦びは」

「貴方は私のもの」

「貴女は私のもの」

二人の心は溶け合い一つになったかのようだった。

「それを今感じている」

「この森の中で」

「私は遠く感じている」

「遠く？」

「これ程近くにいても」

「そう感じるというのだ。」

「それでも。どうしても」

「感じているのね」

「遠さと近さ。何故だ」

「親しさを妨げるものは隔たり。緩慢な時間の遅滞する遅さ」

「その遠さと近さ。優しい近さとすさびたる遠さ」

トリスタンもまた言う。

「この天地に隔たりあるもの」

「暗き場所に貴方がいて明るき場所に私がいて」

「光・・・」

「明るさは光」

「その光が何と長い間消えなかったのだろう」

彼は今度は光を恨めしく思うのだった。

「日が沈んだ時昼は去ったがその嫉妬の息を尚も絶やさず威嚇の印を火に転じ私が近付けないようにしている」

「それが光」

「そう、光だ」

彼は今その光を明らかに拒んでいた。

「私達を妨げるのは光なのだから」

「けれどももうその光は消えてしまったわ」

イゾルデはトリスタンのその光を否定した。

「この世の全ての光は」

「だからこそ私達は今ここにいられる」

「そう」

「陰険な昼は私達にとって忌まわしい敵」

やはり光を拒む。

「愛の悩みの為私も不遜な昼を消したかった。だがそれはできず」
「そして？」

「昼の光が目覚めさせぬ苦しさを辛さがあるだろうか」
半ばイゾルデに、半ば自分に問うている。

「夜の薄暗がりの美しささえ恋人の家に灯りが掲げられれば全てを拒んでしまう」

「けれどそれはかつては」

「そう、私もだった」

かつての自らのことを思い出した。

第二幕その四

「それは。けれど今は違う」

「違うというのね」

「明るい昼の光の世界は元々私のものではなかった」

今それがわかったかのような言葉であった。

「そう。私は元々光の中にはいなかったのだ」

「光の中にはいなかった？ 貴方が」

「私の名はトリスタン」

その名にその意味があると言いたげだった。

「だからこそ。私には昼は」

「ないというのね」

「そう。光の中にはいなかったのだ」

「では私は貴方のもものではなかったのね」

「気高き輝きを以って私の目の前にいる貴女を包んでいたもの」

イゾルデにまた告げる。

「名誉の栄光に誉れの力」

それこそが輝きだというのだ。

「私はそれにこだわり思い誤っていた。きらきらと輝く光で私を明るく照らしていたこの世の名誉の光は空しい歓喜の輝きに過ぎなかった」

「真ではなかったと」

「少なくとも私には」

ここでも光を拒んでしまった。

「私は心の奥底の清い夜に暗く閉ざされながらも目覚めつつ」

「それこそが」

「そう、知恵も瞑想もなくなったただおぼろげに感じられるもの。この目が恥じて見ようとしなかったもの」

彼はさらに言葉を続ける。

「それこそが私が求めているものだつた」

「奴隷の様な虚栄の昼。貴方も私も騙したその日ルはなくなり偽りの優しさや欺きの輝かしさは私の本心を偽らさせていた。私はその光から逃れ偽りを終わらせた」

「私と同じように」

「そう、私と同じように」

またトリスタンに告げた。

「私の心が約束してくれた場所は」

「それは？」

「夜」

一言だつた。

「そこでは偽りが描く嘘も妄想も消え去り永遠の愛こそがある」

「私に差し出されたあの黄金の杯こそがその船頭だつた」

「あの杯こそが」

「快い死への誘いかと思ひ償いの美酒かとも思つた」

「けれどそうではなく」

「この胸の中に崇高な力で夜が優しく黄昏てきた」

何処までも夜の闇を求める彼だつた。

「そうして私の昼は終わった」

「あの美酒によつて」

「あの美酒に祝福を」

夜に誘つたその美酒に対して。

「氣高い魔力に感謝を。私はそれにより死の不思議な国を広々と見てそうして闇をも見通す目を得たのだから」

「けれど光は私達を怨み」

「イゾルデもまた夜の世界の住人であつた。」

「常に私達を阻む」

「昼は恨めしいもの」

「そう、けれど」

「夜は」

二人の言葉がその夜の中に溶け合う。

「私達は夜に捧げられた者達だった」

「その夜の中で」

「そう。夜の中で」

イゾルデもトリスタンも言葉を続ける。

「企み深い昼、妬み深い昼は姦計で私達を引き裂いたが最早その偽りには騙されない」

トリスタンはあくまで夜を讃える。

「昼の虚栄の輝きも誇らかな光も夜によってその眼差しを清められた者を嘲るがそれにはもう晦まさせられることはない」

「この目に見えるのは」

「死の夜を愛もて見定めその深い秘密を知る者には昼の世界の栄光や名譽」

昼の全てを否定する。

「権勢や富裕も目の前に浮かぶ芥の如きもの。私にあるのは清い夜への憧れだけ。太古から永遠に唯一の真実の姿もて愛の歡びが微笑みかける」

「その時私達は世界であり氣高い歡びに生きいと清き愛に生き二度と目覚めることなく迷うことなく優しくも意識の通う望みに達する」

「イゾルデ様」

だがここで物見の櫓からブランゲーネの声がした。

第二幕その五

「御氣をつけ下さい。何かが迫っております」

「迫っている？」

「そうです」

ブランゲーネにはイゾルデの声が聞こえていた。

「ですから。もう」

「去れというのね」

「そうです」

こう言うのである。

「小宵はもう」

「二度と目覚めることがないことを祈る」

しかしトリスタンは二人のやり取りを聞いてもまだ夜の世界にいた。

「死が昼を追いやってくれれば」

「昼と死が同じ力で私達の愛に手を伸ばしていく」

彼は言うのである。

「それは」

「我々の愛はどのような死にも追い払われることはできない」

あくまで夜の世界から離れないトリスタンだった。

「私の前に立ちあらゆるものを脅かしても私は喜んで愛にその全てを委ねるが愛そのものには死の働きも手を委ねることはできない」

「そう。愛には」

「愛の為に喜んで今死ねばどうして愛までが共に死ぬことがあるのか」

彼はイゾルデに言う。

「哀婉の愛がどうして昼と共に終わるのか。愛が決して死なないのならどうしてトリスタンもその愛故に死ぬことができるだろうか」

「けれど私達の愛は」

イゾルデも言う。

「トリスタンとイゾルデの愛である筈」

「そう、その愛は」

「ええ。愛の絆は貴方か私のどちらが死ぬとしてもその死の為に切られはしない」

「その死の為に死ぬのは私達を妨げるものの他に何かあるのだろうか」

トリスタンは言葉を続ける。

「トリスタンが常にイゾルデを愛し、永遠にイゾルデの為にのみ生きることを妨げようとしても無駄なこと。離れることなく永遠に一つになり果てなく目覚めず憂いもなく」

さらに言う。

「愛に包まれその愛にのみ生きる」

「私達は離れることなく共に死ぬ」

イゾルデは死の恍惚に憧れていた。

「二人で」

「二人は永遠に一人となり」
今一つとなっていた。

「目覚めず」

「憂いもなく」

二人の言葉はさらに重なり合う。

「名誉もなく愛にのみ包まれ愛にのみ生きる」

「夜が去ろうとしています」

だがまたブランゲーネが告げる。

「もう。夜が」

「夜が去ろうとしている」

トリスタンは彼女の言葉を聞いて全てを失ったかのような顔になった。

「夜が。私達から」

「目覚めるのなら死を」

「昼はやはり私を目覚めさせるのか」

どうしても昼から目をそらそうとする彼だった。

「昼は」

「昼の欺瞞」

そしてイゾルデもまた。

「それよりも永遠の甘い夜が私達には」

「愛の夜こそ」

イゾルデもトリスタンもただ夜を見ている。

「それこそが私達の世界」

「夜の愛の死こそが。目覚める苦しさはもういりはない」

「私は貴女となり」

トリスタンの心はイゾルデのそれと完全に一つになっていた。

「そして貴方は私となり」

イゾルデの心もトリスタンの心と一つになっている。

「名付けることなく別れることなく」

「新たに知り合い燃え、無限に永遠に」

「一つになり」

二人は同時に言った。

第二幕その六

「熱く焼けた胸の至上の愛の歡喜」

恍惚として言い合う。二人は今完全に一つになっていた。

しかしその時だった。恍惚として抱き合う二人のところに來たのはクルヴェナールだった。彼は血相を変えその手に白銀に光る劍を持っていた。夜の中にその光が煌く。

「トリスタン様、お逃げを！」

「クルヴェナール、何故」

「お話は後です。ですから」

あくまで彼を逃がそうとする。だがトリスタンはイゾルデと共に動こうとはしない。そうしてそこに今大勢の兵士達が來た。彼等の先頭には白く長い髭を持つ思慮深そうな顔の威嚴を持った老人がいた。そしてその横には劍呑な顔をした黄金の髪に青い目の男がいた。彼は既に劍を持ち怒りに満ちた目をしていた。

「まさかと思つたがな」

「メーロトか」

「トリスタン」

彼は怒る声でトリスタンに声をかけてきた。

「これはどういうことだ？何故卿がここにいる」

「トリスタンよ」

そしてその彼の前にいる老人は沈痛な声を彼にかけてきた。この上なく悲しい目で。

「わしは今見ている光景を信じることができない。そなたが」

「……………」

「申し開きはないのか」

王にかわつてメーロトが怒れる声のままトリスタンにまた問うてきた。

「どうなのだ？」

「夜に永遠に留まりたい」

トリスタンはただこう呟くだけだった。

「私は」

「卿は今まで王やコーンウォールの為に尽くしてくれた。戦場では果敢に戦いそうして王妃までもたらしてくれた。その卿がよりによつてその王妃と」

言いながらトリスタンが一言も言わないのを見て言葉を変えてきた。

「言わぬのか。何故だ」

「トリスタンの国は夜の国」

彼はこうメーロトに返してきた。

「光の入らぬ暗い夜の国。母はそこに私を送り出してくれた」

「我が妹だ」

王はまた沈痛な声を出した。

「そなたの父はそなたが生まれる前に戦場に倒れ母はそなたを産んですぐにこの世を去った」

「その通りです」

「母はその死の間際にそなたを名付けたのだったな」

「それが我が名。トリスタンです」

悲しい人という意味だ。

「母が私に与えてくれたのは愛の国、不思議な夜の国なのです」

「夜の国……」

王とイゾルデがその言葉を聞いていた。

「それがトリスタンの」

「イゾルデ」

トリスタンは傍らにいるイゾルデに顔を向けた。

「来てくれるか」

「その夜の国に」

「そう。私は先に行く」

既に生と光を見てはいない。

「その後には貴女も。それは」

「トリスタンが見知らぬ国の為にイゾルデを勝ち得た時」
イゾルデはその時から話すのだった。

「イゾルデはその時に冷酷な男に忠実に従いました」

「それでは」

「貴方は今己の国を私に見せようとしている」

こうトリスタンに答える。

「全ての世を包むその国に私が行かないことはない」

さらに言う。

「トリスタンが行く世界に私もまたこの心だけで向かうだから」

彼はイゾルデのその言葉に無言で頷いた。メーロトはそれを見て目をさらに怒らせそのうえで既に抜いているその剣を彼に突き出してきた。

「弁明はないのだな」

「この通りだ」

剣には臆してはいなかった。

「これでわかる筈だ」

「卿は王の名誉を汚した。それを許すことはできない」

「卿はあくまで王への忠誠に生きるのだな」

「それ以外に何がある」

メーロトの今の言葉、そこには絶対の信念があった。

「私は騎士だ。コーンウォールの」

「だからだというのだな」

「何度でも答える。私はコーンウォールの騎士だ」

やはり彼も引かない。

「だからこそだ。王の為に」

「昼の世界の摂理」

だからといってメーロトを批判する素振りはなかった。

「私は。その摂理を拒む」

言いながら剣を抜いた。

「私は夜の世界に生きる者」

「ならば裁きを受けるのだ」

メーロトは構えに入った。トリスタンもまた。だがメーロトのそれが強いものであるのに対してトリスタンのそれはどういふことか臃なものであった。

「さあ来るのだ」

先にメーロトが剣を出した。当然トリスタンはそれに反撃してくるものと思われた。しかしである。

トリスタンは動かない。その胸にメーロトの剣を受けただけだった。

「何っ!？」

それに最初に驚いたのはその剣を繰り出した他ならぬメーロトであった。

「何故よけなかった、卿ならば」

よけられるというのである。トリスタンの腕を知っていれば誰もがそう思うものだった。

「避けられた筈。それがどうして」

「トリスタン様！」

その胸に剣を受け前に倒れ込もうとする彼をクルヴェナールが何とか助け起こした。

「これ以上はさせぬ！我が主は！」

「どういふことだ」

メーロトは己が倒されるのを覚悟していた。だからこそまだ茫然としていた。

「卿は。まことに」

「トリスタン様、イゾルデ様！」

ここでブランゲーンが駆け込んできた。同時にトリスタンの兵達もいる。

「こちらです。早く！」

彼女はクルヴェナールとも合流しそのうえで二人を連れて夜の闇

に消え去っていく。王もメーロトも今は彼等を呆然と見送るしかなかった。夜の闇の中に。

第三幕その一

第三幕 イゾルデの愛の死

緑の蔦に覆われた白い石の壁の城壁の中央にある門。そこにクルヴェナールは立っている。その彼のところに一人の身軽な身なりの少年がやって来た。

「クルヴェナール様」

「何だ？」

クルヴェナールは彼に顔を向けてその声に問うた。

「トリスタン様はまだ目覚められませんか？」

「まだだ」

クルヴェナールは彼の問いに悲しい顔で首を横に振った。

「それに目覚めておられたらとても今まで命はもっていなかった」

「そんなに悪いんですか」

「生きておられるのが不思議な位だ」

彼はこうも牧童に告げた。

「あれだけの傷だからな。とても」

「そうですか」

「それでだ」

ここまで話してから牧童に問うた。

「あの方を目覚めさせることができるコーンウォールからの船はただか」

「来たらこの曲を吹きましょう」

言いながら腰にあった笛を手に取りそのうえで吹きはじめた。何処までも聴こえるような澄んでそれでいて何処か悲しい、そんな笛の声であった。

「この曲を」

「うむ。それでは船が見えたその時にな」

「わかりました」

牧童はそれに応えて城門から姿を消した。クルヴェナールはそれを見届けてから城の中に入りトリスタンの部屋に向かった。簡素な部屋の中に座って眠る騎士のベッドがありトリスタンはそこで眠っていた。石のその部屋の左手には大きな窓がありそこから見えるのは青い海だ。

青い海は何処までも澄んで美しい。そしてカレオールの美しい田園もそこに見える。そこからあの牧童の笛の音が聴こえる。見ればベッドのトリスタンは目を覚ましていた。

「目覚められていたのですか」

「古い歌だ」

彼はその牧童の笛の声を聴いていたのだった。

「あの歌が私を起こしてくれた」

「そうですか」

「ここは何処なんだい？」

今度は部屋の入り口にいるクルヴェナールに問うてきた。

「クルヴェナール、ここは一体」

「私のことがわかるのですか」

「うん、わかるよ」

弱ってはいるがそれでも微笑んでいた。

「クルヴェナール、それでここは」

「窓の外を」

クルヴェナールはここで部屋の左手のその窓を指差したのだった。

「そこに答えがあります」

「カレオールか」

トリスタンはその窓から見える景色を見てわかった。

「私の故郷であり生まれ育った地か」

「皆貴方を待っていたのです」

クルヴェナールは恭しく彼に告げた。

「民もこの城も土地も家畜も全てが。貴方を待っていました」
「待っていてくれたのか。私を」

「コーンウォールから戻られて」

「そうか、コーンウォールから離れて」

トリスタンはコーンウォールにいないことに少し寂しさを感じて
いるようだった。

「今はカレオールに」

「ここまでお連れしました」

クルヴェナールはまた彼に述べた。

「お嫌だったでしょうか」

「私をここまで運んでくれたのか」

「剣に倒れた貴方をコーンウォールから船にお乗せしてそしてここ
に」

「故郷に」

「傷を癒されるよう」

クルヴェナールの心からの願いであった。

「どうか。ここは」

「私が目覚めたこの国にはあの人はいない」

しかしトリスタンは彼を見ずこう呟くのだった。

第三幕その二

「私は夜の国にいる者。私は最初にいた世界に戻っただけ。そこで見たものは」

「見たものは？」

「世界の夜の遠い国」

トリスタンは言った。

「そこで知ることのできる唯一のことは神の如き永遠の忘却」

「忘却！？」

「そのおぼろげなもののさえも消えてしまったのか」

言いながら窓の方に顔を向けていた。そこにあるのは昼の世界だった。

「昼の世界の光は私を歓喜から絶望へと追いやる。イゾルデがいないこの世界にいて何になるというのだ」

「トリスタン様……」

「会いたいというこの願いもきしみながら背後で死の扉が不気味な音と共に閉じられるのか。昼の光が今私に襲い掛かり何もかも奪おうとする」

「昼が……」

「彼女のいる夜を消し去りそのうえで私を絶望に追いやる。この光を永遠に消しあの人の下に行くことこそが私の心から願いだということに。この世は忌まわしい光で満ちている」

「しかしです」

クルヴェナールは静かに嘆く主に声をかけてきた。

「トリスタン様」

「うん」

「私はイゾルデ様に文を送らせて頂きました」

「文を？」

「左様です」

まずこう告げるのだった。

「是非こちらに来られるよう」

「イゾルデがここに」

トリスタンの目の光が僅かだが強くなった。

「来るというのか」

「そうお返事を頂きました」

「まだ夜は去つてはいなかった」

トリスタンは彼の言葉を聞いて言った。

「イゾルデが夜の中から私を呼んでいる」

「ですから希望を」

すかさず主に希望を持つように告げる。

「貴方様は今まで眠っておられました。が私はそれを治す方法も考え付きました」

「それは一体」

「あの方です」

「イゾルデが？」

「そうです、あの方の妙薬です」

それだというのである。

「あの方が来られれば。ですから」

「そうか。有り難う」

トリスタンはイゾルデに礼を述べてからまた言うのだった。

「イゾルデが来る。あのイゾルデが」

「はい」

「クルヴェナール」

そのうえでクルヴェナールにも顔を向けて声をかけた。

「いつも私の為に尽くしてくれるんだね」

「それが私の役目ですから」

「父も母もいない私を育ててくれて」

彼はクルヴェナールに育てられたのだ。まさに彼にとってクルヴェナールは父であり母でもある。それだけかけがえのない存在なの

だ。

「我が盾となり剣となり戦ってくれて。私が憎んだ相手は憎み愛した相手は愛してくれたな」

「それは貴方だからです」

「私だから？」

「トリスタン様ですから」

だからだというのだ。

「私は」

「王にお仕えしている時にはそなたも仕えてくれた」

主が仕えているからである。

「あの方を裏切ってしまった私にも仕えてくれてそのうえで」
「こま

で」
「それもまた」

「全てはそなたのおかげだ」

また彼に礼を述べた。

「そして今イゾルデが来てくれる」

「そうです」

その彼がイゾルデを呼んだのである。

「間も無くここに」

「来た！？」

トリスタンはその中で不意に声をあげた。

「イゾルデが来た！？」

「まさか」

「船が来る」

窓に顔を向けて言うのだ。

第三幕その三

「今船が来ている。コーンウォールの方からだ」

「まさか」

「嘘ではない。旗がマストにひらめいていく」

こう話す。

「船が。今ここに来る」

「笛の音は」

なかった。それはなかった。クルヴェナールはそれを確かめて落胆した。そしてそれはトリスタンも同じだった。彼も沈んだ顔になつてしまつていた。

「昔馴染みの悲しい調べ」

トリスタンは笛の音に対して言った。

「私は父も母も知らない。私が生まれる前、生まれてすぐに世を去つた」

それが彼のはじまりだった。

「夕風に暁にあの笛は聴いてきた。父と母のことを想う度に」

「はい、いつもあの笛の音が」

聴こえていたのだった。彼には。

「あの声は父や母の心にも伝わっていたのか。そして私にも問い掛けていた。私はどの様な運命に定められ生まれたのか。そして私の運命は」

そのことを今言葉に出していた。

「夜の世界にいる我々は死に憧れその休息を求める。あの男と闘い傷を負った時にも聴いたあの声はやはり死への憧れの誘いの声だったのか」

今そう考えていた。

「私は生きていたが昼の世界にいた。私は死という休息を望んだが昼の中に戻った。光の中に休息はなく私を苦しめるだけのものだし

かない」

「ここでも光を拒むのだった。

「この灼熱のもたらす憔悴を癒せるのは何か。この苦しみは私が作ったものなのか」

「それは」

「父の苦悩と母の陣痛を与えた私が。愛の涙から、笑いや泣き声、歓喜や痛苦からこの苦しみを見出したのか。その私には呪いこそあれど救いはないのか。夜の救済は」

「ここまで言つてそのまま沈もうとする。だがその彼に対してクルヴェナールはまた言うのだった。

「イゾルデ様が」

「イゾルデが？」

「あの方がおられます。ですから」

「夜が来ないと思うなと」

「そうです」

彼が言いたいのはそのということだった。

「ですから」

「では船は」

クルヴェナールの言葉に應えるようにして問つてきた。

「来るのか？」

「今日のうちには」

あえて主を元気づけるようにしての言葉だった。

「来られます。必ず」

「来るのか」

「間も無くです」

また彼に告げた。

「ですから。それは」

「イゾルデ」

その名を口にする。

「あの気高く優しい姿が。柔らかい波の快い花に乗って」

「来られるのです」

「夜の慰めと憩い、そして微笑を私に送り」
さらにいう。

「私に最後の力を与えてくれる。クルヴェナール」

「はい」

「見に行ってくれ」

こう彼に告げた。

「イゾルデの船が何時来てもいいように」

「はい、それでは」

こう話をした時だった。ここであの牧童の笛の音が聴こえてきたのだった。

「この笛の音は」

「間違いない」

クルヴェナールもトリスタンもそれぞれ言った。見るともう海に船が見えている。

「来られました」

「来たのだ」

またそれぞれ言う。

「あの方が」

「イゾルデが」

トリスタンは今にも起き上がらんばかりになった。そのうえでまたクルヴェナールに言うのだ。

第三幕その四

「クルヴェナール」

「何でしょうか」

「決めた」

「まずはこう告げた。」

「若しあれがイゾルデの船なら」

「はい」

「私のものは全てそなたに譲る」

「こう言うのである。」

「全てな」

「勿体なき御言葉」

「それでだ」

「己のものを全て譲るとしたうえでさらに問うのだった。」

「あれは本当にイゾルデの乗っている船なのだろうか」

「こう疑念を抱いたのだった。」

「果たして。本当に」

「間違いありません」

「だがクルヴェナールはこう答える。」

「あれはイゾルデ様の乗っておられる船です」

「わかるのか？」

「はい。何故ならあの船の帆は黒ですね」

「確かに」

「見ればその通りであった。」

「それが何よりの証拠です。イゾルデ様は私の文への返信でこう書いておられました」

「どういったことを？」

「若し自分の船がカレオールに向かうならば」

「うむ」

身を乗り出してクルヴェナール話を聞く。

「その帆は黒だと」

「では間違いないのだな」

「はい、間違いありません」

しつかりとした声で主に答える。

「あの船にはイゾルデ様が乗っております」

「そうか」

それを聞いて安堵した顔になるトリスタンだった。

「では。やはりあの船には」

「イゾルデ様が乗っております」

クルヴェナールはトリスタンを励ますように告げた。

「間違いなく」

「間もなくここに来る」

トリスタンは船を見詰めながら言う。

「この城に」

「では私がお迎えの用意を」

クルヴェナールはすぐに部屋から出ようとする。

「それでは。また」

「昼は過ぎ去り夜が戻って来た」

トリスタンは一人になるとベッドの中で言うのだった。

「私の血潮がやはり心が喜びに湧く」

このことを実感していた。

「限りなき快楽と喜びしき狂乱。この寝床にしながら心の高鳴ると

ころに行きたい。今私は夜の喜びの力を以てイゾルデの前に向かう」

ベッドから起き上がった。

「幾多の戦いで血を流しあの男との闘いでもそうだったが私は今日もその血を流そう」

言いながら傷口の包帯を引き千切る。血が出るのも厭わない。

「我が血よ。楽しく流れ出よ」

やはりその血が流れても構わなかった。

「この傷を永遠に閉ざしてくれるイゾルデが祝福の為に来る。この世界が滅びようとも」

「トリスタン」

城の外から声がした。

「この城にいるのね」

「夜の世界がここに」

光ではなく夜の世界を見続けている。

「今ここに」

言いながら城の門に出るとそこにイゾルデがいた。そして今イゾルデと抱き合った。

「トリスタン・・・・・・・・・・」

「イゾルデ・・・・・・・・・・」

イゾルデを抱き締めるのと同時に身体が崩れ落ちた。

「私は夜の世界に永遠にしよう」

こう言って完全に崩れ落ちた。そうしてその場で言葉通り永遠にやるの世界に入ったのだった。

第三幕その五

「私がここに来たのは」

崩れ落ちたトリスタンを抱いたまま呟く。

「貴方と共に行く為」

こう呟くのだった。

「貴方と共に夜の世界に行く為に来たのに。けれどその貴方は」
最早何も語らなくなっていた。

「先に行くとは。それにはまだ早いというのに」

そのまま言葉を続ける。

「貴方と一時目を覚ましている為に私はここに来たというのに。貴方はどうして」

先に行ったのかと問う。

「傷は何処なの。私の妙薬で」

治そうというが返答はない。

「私達が一つになる時に命の火も消える。目もしらみ心臓も止まり
息も絶えてしまえばいい」

だがそれでも返答はないままだ。

「貴方の為にここに来たのに先に行ってしまった。私の苦しみも嘆き
も昼の世界では聞かないというのね」

そのまま気を失いそこに倒れ伏す。トリスタンの亡骸に重なるようにして。

イズルデが気を失うとその場が不意に騒がしくなった。牧童がクルヴェナールに叫ぶ。

「クルヴェナール様！」

「わかつている！」

彼は剣を抜き城門の前に現われた。

「敵が来ています！」

「コーンウォールから」

死を決した顔で牧童に応える。

「来ている」

「そしてトリスタン様が」

「・・・・・・」

眠っている主を見て言葉を失ってしまった。

「もう」

「まずイゾルデ様を頼む」

牧童に対して告げた。

「そしてトリスタン様は」

「どうされますか？」

「仰向けにしておいてくれ」

今はイゾルデの下にうつ伏せに眠っている。

「そのお顔が安らかに地についていないようにな」

「わかりました。それでは」

「そして城門を閉じるのだ」

次に告げたのは城のことだった。

「そうして。誰も入られないように」

「はい」

「それが終わればそなたは去れ」

「えっ!？」

「聞こえなかったのか？去れというのだ」

また牧童に告げる。

「わかったな。去れ」

「けれどそれは」

「いいのだ。わしはここで死ぬ」

彼は既に意を決していた。それはもう目にも出ている。

「だからだ」

「クルヴェナール様・・・・・・」

「さらばだ」

彼はもう牧童に顔を向けなかった。

「これで」

「・・・・・・・・わかりました」

牧童は城門にかんぬきを下ろすとそれを最後に何処かに姿を消した。だが今度はそこにブランゲーンがやって来た。

「イゾルデ様、こちらに」

「貴女は下がっているのだ」

クルヴェナールは正面を見たままだった。

「いいな。これは私の仕事だ」

「貴方もまた」

「ここで戦うのみ」

右手の剣が煌く。

「だから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「来たか」

ブランゲーンは気を失っているイゾルデを助け起こしたまま俯いてしまった。クルヴェナールの前には騎士達が迫る。そこにはメーロトもいた。

第三幕その六

「クルヴェナール。トリスタンは」

「答えるつもりはありません」

「眦を決してそのメーロトに告げた。」

「決して」

「答えぬというのなら剣に訴えるが」

「それが王の御意志ですか？」

「そうしなければならぬからだ」

彼はトリスタンの亡骸を見ていなかった。クルヴェナールの後ろにあつて見えない。

「だからこそ。通らせてもらう」

「ならば……！」

「うつ……！」

二人は剣を交えたが決着は一瞬だった。既に死を覚悟しているクルヴェナールに勝る者は誰もいなかった。彼は一撃で倒されてしまった。

「王よ……申し訳ありません」

その場に崩れ落ち最後にトリスタンの亡骸を見た。

「トリスタン……」。そうかもう夜に」

これが彼の最後の言葉だった。最後にトリスタンを見て事切れた。だがまだ騎士達はある。クルヴェナールは彼等の中に飛び込み次々と切り伏せるのだった。

「トリスタンの為に！」

彼は言う。

「ここは何としても……！」

「クルヴェナール殿」

だがその彼にブランゲーネが言うのだった。

「貴方は戦つてはなりません」

「何故だ？」

「既に王は」

「王なぞ関係ない！」

彼にとつては既にそうであつた。

「最早。私には」

騎士達を切り伏せ続け己も傷を負つていく。しかし彼はそれでも剣を振るい続ける。だがその彼の前にあの老人が姿を現わしたのだつた。

「止めよ、猛き者よ」

「王が」

ブランゲーネが彼を見て言った。

「遂にこちらに」

「最早戦いはならん」

「私は死の世界にいます」

クルヴェナールは王を前にしてもこう言うだけだつた。

「ですから。最早戦いは」

その中で傷を深くしていきやがて膝をついた。王は周りの者に彼の手当てを命じそのうえでブランゲーネに対して問うのであつた。

「イズルデは？」

「こちらに」

不安な声で問う王に己が抱き止めている彼女を見せた。

「おられます。御無事です」

「そうか」

王はそれを聞いてまずは安堵した。しかしであつた。

さらに問うのだった。今度は先程より不安な顔で。

「トリスタンは」

「先に」

左右に來た者に手当てを受けているクルヴェナールが答えた。だがもう手遅れで倒れている彼は血に塗れていた。その息も絶え絶えになっている。

第三幕その七

「行かれました」

「何故だ……」

王はその言葉を聞いて絶望そのものの声をあげた。

「何故だ……トリスタンよ」

「トリスタン様」

クルヴェナールはトリスタンの亡骸に顔を向けた。王もそれと共にトリスタンの亡骸を見てしまった。その顔がさらに沈痛なものになる。

「私も今から夜の世界へ」

「死んだか」

王はクルヴェナールの死を見届けて呟いた。

「誰もが。全てが死ぬ。トリスタン、今日もまた私を裏切るのか」
両目から涙を流していた。

「信頼する友、我が甥よ。そなたに無二の誠意を示そうと思いいここに来たというのに。そなたは目覚めず我が悲しみを置いたままにするのか」

こうトリスタンの亡骸に告げる。

「不実にしてこの上なく忠実なる友よ」

「王よ」

ここでブランゲーネが王に告げてきた。

「どうした？」

「イゾルデ様が」

今その手の中に抱いているイゾルデを見ての言葉だった。

「気を取り戻されました。今」

「そうか」

「御氣を確かに」

ブランゲーネは目を開きだすイゾルデに対して告げた。

「私はいつもここにいますから」

「私はそなたとトリスタンを赦そうと思っていた」

王はブランゲーネの手の中から離れゆっくりと、幽玄に立ち上がるイゾルデに対して告げてきた。

「二人の愛の深さを知り。メーロトにも命じてここまで来たのだが。それは適わなかった」

「適わなかった？」

「トリスタンは死んだ」

王は沈痛な声でイゾルデに告げた。

「そこに。静かに眠っている」

トリスタンの亡骸をこのうえなく悲しい目で見ている。

「最早。目覚めることはない」

「いえ」

だがイゾルデはここで言った。

「それは違います」

「違うだと？」

「イゾルデ様、それは一体」

「彼は目を開けているのよ」

トリスタンに顔を向けて。静かに微笑んで告げた。そのうえで彼にゆっくりと歩み寄りつつ。その言葉をさらに続けるのだった。

「穏やかに、静かに。彼は微笑んでその目を優しく開いているわ。それが見えないのかしら」

「イゾルデ……」

「まさか……」

「夜の闇は広がりそこにあるのは星の光」

恍惚として語りトリスタンにさらに近付いていく。

「その光は次第に明るさを増し夜の中に輝いていて。この人はその中で微笑んでいるのよ。その心は豊かで気高く唇からは陶然と柔らかく快い息が溢れ出ていて」

遂にトリスタンの側まで来た。ゆっくりと腰を下ろす。まるでこ

の世のものではないような動きで。

「私は感じるわ。この方の全てを」

そのままトリスタンを抱き寄せる。白い服の中に黒いトリスタンを。

「静かに歓びを訴え全てを語りつつ」

そのうえでさらに言葉を続ける。

「優しく慰めるようにこの人から響き出て私の中に入る調べ。そしてその私の中で高く舞い上がり冴えた響きを聴かせてくれる。穏やかな風のように。喜びの香り溢れる波の様に」

語るその顔に夜が舞い降りた。

「私はその中にいるのよ。この万有の中にある至上に。今この人と共に」

ここまで言うとき静かにトリスタンの上に倒れ伏した。ブランゲ―ネはただ涙を流すだけであり王は無言で周りの者達に命じ彼等を従え祈るのだった。その二人に対して。二人は今夜になった世界の中で静かに、永遠に微笑んでいた。誰にも妨げられることなく。

トリスタンとイゾルデ 完

2009・2・26

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2069k/>

トリスタンとイゾルデ

2011年4月28日00時57分発行